

道徳的判断力、心情、実践意欲と態度を高める指導の工夫 ～登場人物への自我関与を通して～

提案者 栃教協教研推進委員会教員部
那珂川町立小川小学校 教諭
長 嶋 洋 一
佐野市立出流原小学校 教諭
亀 田 久美子

1 はじめに

我が国の道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものとされてきた。平成27年3月27日の学校教育法施行規則の改正により、「道徳」を「特別の教科である道徳」とするとともに、小学校学習指導要領、中学校学習指導要領及び特別支援学校小学部・中学部学習指導要領の一部改正が告示された。そして小学校では平成30年度から、中学校では令和元年度から、「道徳の時間」が「特別の教科 道徳」と変更され、教科化となった。

栃教協教研推進委員会教員部では、長年継続して、「心の教育」及び「道徳教育」の研究を行ってきた。本部会では、平成29年度より3カ年計画で「道徳評価シート」を活用した道徳の評価及び指導と評価の一体化について研究を行ってきた。時間毎の児童生徒の評価を蓄積することで変容が捉えやすくなったこと、また、評価の視点が明確になることで指導の改善が図られ、児童生徒の道徳的価値への理解が深まってきたなどの成果を得ることができた。

本年度は、昨年度研究した文科省が示す「質の高い多様な指導方法」の1つである、登場人物への自我関与が中心の学習の指導方法を1年間続けた結果、児童にどのような変容が見られたかを検証し、それらの取組に効果があったのかを提案していく。

2 提案内容

(1) 道徳評価シートについて

○作成までの経緯

本部会では、「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」（平成28年7月）の資料を基に、児童生徒の変容や成長を長期的に見取る評価方法の工夫を考えた。そして大きくくりなまとまりを踏まえた評価を行うために、毎時間の見取ができ、かつその見取の蓄積により長期間の変容が捉えられる評価シートを作成した。見取の視点については、専門家会議の資料を基に、下記の4視点を設定した。

《道徳評価シート見取の視点》

【視点①】意欲的に考えている

ねらいとする道徳的価値について意欲的に考えようとしているか、授業中の発言や話し合いへの参加の様子、ワークシートへの記述など様々な場面で見取る。できていれば○。

○児童の変容（評価シートより）

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	3			
主題名	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	よいことをする	...	
資料名
1																																						
2																																						
3																																						
4					○	○						○																										

普段の学習でも、書いたり考えたりすることが苦手な児童Aが、回数を重ねるにつれ、だんだんと自分の考えを書き表せるようになってきた。後半は○がつくことが増え、発表することもあった。

○同じ価値項目での比較

5	24	みんなの力になりたい	これからもっとハートが増えるように、親切をしていきたい。
あなたがい	...		
こころ	...		
はやとの	はしの		
ゴール	おおかみ		
	○		
	○		
	○		
○	○		

児童Bの同じ価値項目の教材（B親切、思いやり）を比較すると、後半で○が増えていた。また、授業中に考えたことについても、後半になるにつれ、今後の自分の生活について具体的な思いを広げられるようになってきた。



【役割演技】

教材を読んだ際に、一場面を登場人物になりきって児童に演じさせることによって、登場人物の一人のおかれている状況や気持ちの一つずつ整理していくことができた。また、ないた赤おにの役割演技の場面では、最初は赤おにと青おにの役のみだったが、「ぼくは村人をやりたい」と自分たちで役を作っていた。役が増えたおかげで、赤おにの心の葛藤について深くとらえることができた。

役割演技で赤おにの気持ちを考えた後に、「本当の友達」について問うことで、「相手の気持ちを考えて行動できる人」「相手を思いやれる人」など深く考えることができた。

○学級児童全体の変容（宇都宮市学習定着度調査より）

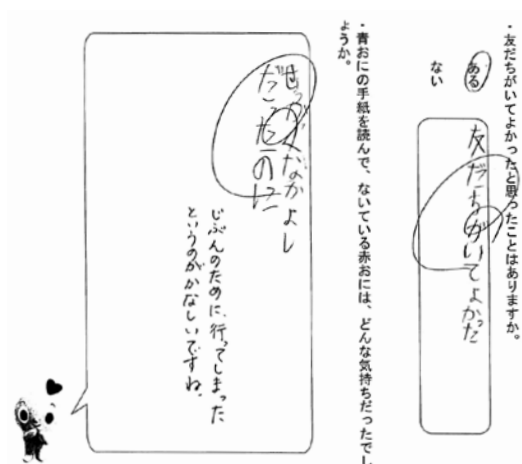
R元年度

⑦ どうとく				
本年度	70.3	53.8	53.8	46.2

R2年度

⑦ どうとく				
本年度	71.4	84.6	84.6	15.4

児童全体の変容としては、宇都宮市の学習定着度調査で、1年生の時には「道徳は好きですか」の問いに、肯定割合が53.8%とあまり高くなかったが、2年生の調査では、肯定割合が84.6%と大きく上向いた。自我関与を意識し、発問や活動を工夫してきた成果と思われる。



児童Aは、自分の気持ちを表現するのが得意ではなく、1年生の時に友情・信頼を扱った学習では、学習に参加しようとせず、「ぼくには、友達はいない。」と言って頑な様子が見られたが、2年生の「ないた赤おに」の授業では、「友達がいてよかった」「本当の友達はいろいろなことをしてくれる」とワークシートに書き、友達についての考えを深めることができた。本人の成長もあるが、道徳の授業で繰り返し考えてきたことも大きいと思われる。

3 成果と今後の課題

(1) 成果

- ・発達段階に応じて教具を工夫し、1年間それらの取組を継続することによって、自我関与しながら主体的に考える児童生徒の姿が多く見られるようになり、評価シートでも○がつくことが増えてきた。その結果、普段の生活でも道徳的实践力の高まりが見られた。
- ・昨年研究した3つの教材以外でも、「心情円グラフ」や「発問の工夫」などの手法は、教材に自我関与させ、深い学びをすることに役立った。

(2) 課題

- ・学年や発達段階に応じた、有効な手立てや教材とのマッチングを考える必要がある。
- ・自我関与させるための、より有効な手立てを考えていく必要がある。
- ・コロナ禍で話し合い活動が制限される中で、子供たち同士の意見をどのように交流させることができるのか、交流のさせ方を考えていく必要がある。また、GIGAスクール構想によりタブレットが導入されたことで、タブレットを活用した新たな道徳の授業についても考えていく必要がある。